

【図表3】AIが汎用的技術になる時代における大学教育のあり方の例

|                         |                                                               |
|-------------------------|---------------------------------------------------------------|
| ①AIと一緒に学ぶ教育             | AI活用を前提とする教育環境整備                                              |
| ②AIの回答を評価・判断する能力を育成する教育 | 評価・判断するために必要な知識・スキル・経験を養うために、あえてAIを使わない授業を行う。AIがなかった時代を追体験させる |
| ③創造性を伸ばす教育              | AIのポテンシャルを引き出す、創造的にAIを使うための授業                                 |

\*取材を基にBetween編集部にてまとめ

【図表2】AIが汎用的技術になった際、AIに代替されやすい・されにくいタスクと能力

|               | 具体的なタスク                    | AIで可能 | 人間の役割                            |
|---------------|----------------------------|-------|----------------------------------|
| 課題を発見する       | ▶現状を分析し目的や課題を明らかにする        | △     | 何に問題意識を持つか、どれを優先するか意思決定するのは人間の役割 |
|               | ▶数ある課題のうち、重要なのは何か、優先順位をつける | △     |                                  |
| 課題解決法を考える     | ▶解決策のアイデアを出す               | ○     | —                                |
| 課題解決を<br>実践する | ▶複数の解決策の中から選ぶ              | △     | 判断して実践                           |
|               | ▶さまざまな人と協働して実践             | ×     | 調整しながら実践                         |
|               | ▶解決するまで取り組む                | △     | 責任感をもって実践                        |
| イノベーションを起こす   | ▶AIのポテンシャルを引き出す            | ×     | ありたい世界の発想、想像する力が必要               |

\*取材を基にBetween編集部にてまとめ

【図表1】G7専門家パネルが示した「AIと経済のこれから」論点

|   |                                                                       |
|---|-----------------------------------------------------------------------|
| 1 | AIの進歩は速く、「わかってから動く」では遅い                                               |
| 2 | AIは成長の源泉になり得るが、雇用と賃金の分布を揺さぶる                                          |
| 3 | 政策に必要なのは、「規制か推進か」の二択ではない。不確実な将来に備え、労働移動、行政能力、金融安定を支える制度を前もって整えられるかである |

AIはもはや技術開発の話ではなく、  
経済運営の根幹に関わる政策課題である

\*取材及び宮本弘暁著「AI大格差」(日本評論社)より、Between編集部にてまとめ



「人工知能と経済・金融政策立案に関するハイレベル専門家パネル報告書」の表紙。G7各国の研究者・実務家の議論をまとめた。

### 生成AIが揺さぶる 若年層の雇用

AIは今、非常に速い速度で進歩し、私たちの生活や仕事に入り込んでいます。私もさまざまなタスクを24時間稼働するAIに頼むことで、助手がいなくても研究活動ができるようになっていきます。

こうした大きな社会変化の中、先進7か国(G7)は2024年12月、AIが社会に与える影響を検討する専門家会議<sup>\*</sup>を実施し、報告書をまとめました。私も含めた各国の専門家が出した結論は、「AIはもはや技術開発の話ではなく、経済運営の根幹に関わる政策課題である」というものでした【図表1】。というのもAIは従来の技術革新と異なり、知的分野であるホワイトカラーの労働市場に大きな影響、変革をもたらしているからです。

企業は知識や作業経験をAIで補うことで、経験の浅い社員の生

## AIが変える労働市場と 大学教育のこれから

AIが労働市場を大きく変えつつある今、求められる大学での学びとは何か。労働経済学の専門家に聞く。



一橋大学経済研究所  
教授

宮本 弘暁

みやもとひろあき●東京大学公共政策大学院特任准教授、国際通貨基金エコノミスト、東京都立大学経済経営学部教授などを歴任し、2024年より現職。近著に『AI大格差』(日本評論社)。

に仕事が奪われる」という論点に目が向きがちです。しかし、新しい技術はこれまでも新たな産業と仕事を生み出してきました。GAFAM<sup>\*2</sup>のうち、アップルを除く企業がインターネット普及後に誕生し、巨大な産業に成長したことはその代表例です。AIの普及により、なくなる仕事がある半面、新たな産業や仕事が生まれます。そこが労働力を吸収するため、恐れずプラスの面に目を向けることが重要です。

### AIを「使える」とは どういうことか？

AIは今後、電気と同じような「汎用的技術」となり得るでしょう。というのもデジタル機器と異なり、AIは操作上のハードルがないからです。スイッチを押せば電気が使えるように、AIもボタンを押して話せば、入力せずとも、誰でも使えます。このことは、操

断、調整しながら責任をもって実践することだからです。一方で、解決策のアイデアは、AIに分析提案させてもいいでしょう。しかしAIの可能性を引き出しイノベーションを起こすには、人間が想像力や発想力を働かせて、「どんな世界にしたいのか」を描き出すことが欠かせません。

### AI前提の社会における 大学教育のあり方

AIを「使って」社会課題を解決し、よりよい未来をつくる人材育成に向けた大学教育のあり方として、3つほど考えてみました【図表3】。まずは、AIを使うことが前提の教育環境を整えることが必須でしょう①。そのうえで、②AIの回答を評価、判断する力を養成するために、あえてAIを使わない授業―AIがなかった時代を追体験するような教育―も提供する。教養教育は、AIの出した答えを判断するための「AIを使う基礎体力」を養うものとして、より一層重要になると私は考えます。③の創造性を伸ばすには、ゼミや少人数教育、体験型授業が有効です。

このような教育を行うには、むしろ、われわれ自身もAIを活用

し、その可能性と限界を理解しなければなりません。そのうえで大学教員は、学生から「AIに聞けば十分だ」と思われぬよう、経験や価値観、判断のあり方を通じて、「この人から学びたい」と憧れられる存在になることが、より一層大切になるのではないでしょう。AIの進化と同様に、大学が見逃せないもう一つの社会変化が長寿化です。健康な高齢者も増えています。今の高校生や大学生は、70代になっても多くが働いているかもしれません。その長い職業人生において、AIのような新しい技術が今後も次々と登場してくるでしょう。その際、必要になるのは、時代に応じて知識や技術を加えていく「学び足し」です。

そうすると、大学の役割も見直す必要があります。18歳から22歳だけが集まる場所ではなく、いつでも戻って来られる学びの場となることが望まれます。ただし、学生が社会人になってから再び大学で学ぼうと思うのは、最初の大学での教育を通して「この大学で学んでよかった」「ここで得た力が仕事に生きている」という実感があってこそです。目の前の学生の教育満足度を高める努力は、卒業後に彼らが大学に戻ってくる基盤となることでしょう。

\*1 元メキシコ財務大臣のルイス・ビデガライ・カソ博士(経済政策とテクノロジー)を議長とし、AIやマクロ経済政策、公共財政、コンピューターサイエンスといった分野の研究者・実務家が各国から集まり、半年にわたり議論を重ねた \*2 アメリカの大手IT企業Google、Apple、Facebook(現Meta)、Amazon4社の頭文字から作られた造語